

集英社文庫

日本ペンクラブ編

食前にたっぷり

色川武大・選



集英社



集英社文庫

食前にたっぷり

昭和58年11月25日 第1刷

定価はカバーに表示してあります。

編 者 日本ペンクラブ

発行者 堀 内 末 男

発行所 株式 集 英 社
会社

東京都千代田区一ツ橋2-5-10
〒101

電話 東京 (238) 2842 (編集)
(230) 6171 (販売)

印 刷 株式会社 廣済堂

著者と了解のうえ検印を廃します。 (落丁本・乱丁本はおとりかえします)

© The Japan P. E. N. Club 1983

Printed in Japan

ISBN 4-08-751027-7 C0193

集英社文庫

日本ペンクラブ編

食前にたっぷり

色川武大・選

集英社版

文学は人生の地理歴史を教えてくれる、と菊池寛は言った。その地理歴史を知ること
は、人生の旅を味わい、手引きを得るよすがになるにちがいない。小説には、幸福や成
功より迷いや過ちや不幸や失敗が多く描かれているであろう。人生はしょせん試行錯誤
だからである。それだけ小説は身近に人生を感じさせてくれる。そこには涙や嘆きや痴
愚がより多く聞かれるかもしれないが、喜びと笑いとユーモアも乏しくないであろう。
人生はゲーテの言うように、真剣な冗談なのである。

人生の反映である多彩な小説によって、汲み尽しがたい生活を味わい、ひと時を楽し
むうちに、生きる知恵と糧を汲み取ってもらうことが出来れば、という気持ちで、日本
ペンクラブは現代日本文学を代表する作品のシリーズを編むことにした。この精彩ある
異色シリーズが大方の、特に若い方々の共感を得られれば幸いである。

昭和五十四年（一九七九年）三月

社団法人 日本ペンクラブ

目次

美食倶楽部……………谷崎潤一郎 八

小僧の神様……………志賀直哉 五

*

ロッパの悲食記(抄)……………古川緑波 七

夢声戦争日記(抄)……………徳川夢声 一三

*

食卓の光景……………	吉行淳之介	一八三
満腹の星 いかもの食い……………	小松左京	一九四
骨の肉……………	河野多恵子	二〇六
ビフテキ……………	富岡多恵子	二二九
おいしい罌……………	日影丈吉	二三七
この町……………	山口 瞳	二四四
蟹甲癬……………	筒井康隆	二六六
わたし食べる人……………	阿刀田高	二七九

最後の晩餐Ⅰ・Ⅱ	開 高 健	三六
二ノ橋 柳亭	神吉拓郎	三四
鶏を煮る	八木忠栄	三七六
わたしの好物	深沢七郎	三八一
解説	色川武大	三八九

食前にたっぷり

美食倶楽部

谷崎潤一郎



(1886.7～1965.7) 東京生れ。東大中退。明治四十三年、自然主義文学に反し、退類的な女性賛美の「刺青」で登場。「異端者の悲しみ」「春琴抄」「吉野葛」など傑作を発表。戦中軍部の圧迫で発表できなかった「細雪」が、昭二二年毎日出版文化賞を受賞。晩年に至っても「鍵」「瘋癲老人日記」など、女性拝跪の極致を示す耽美的な作品で健在を示す他、「源氏物語」現代語訳等、日本文学史上に不滅の足跡を残した。『谷崎潤一郎全集』全28巻、中央公論社刊。「美食倶楽部」は「大阪朝日新聞」(大正六年一二日)に連載された。

恐らく、美食倶楽部の会員たちが美食を好むことは彼等が女色を好むものにも譲らなかつたであらう。彼等はみんな怠け者ぞろいで、賭博を打つか、女を買うか、うまいものを食うより外に何等の仕事をも持っては居なかつたのである。何か変つた、珍らしい食味に有りつくことが、美しい女を見附け出すのと同じように彼等の誇りとするところ、得意とするところであつた。そう云う食味を作り出す有能なコックがあれば——、天才のコックがありさえすれば、彼等は一流の美女を独占するに足るほどの金を出しても、それを自分の家の料理番に雇うかも知れなかつた。「芸術に天才があるとすれば、料理にも天才がなければならぬ。」と云うのが、彼等の持論であつた。なぜかと云うのに、彼等の意見に従うと、料理は芸術の一種であつて、少くとも彼等にだけは、詩よりも音楽よりも絵画よりも、芸術的效果が最も著しいように感ぜられたからである。彼等は美食に飽満すると——、いや、単に数々の美食を盛ったテエブルの周囲に集まつた一刹那の際にでも——、ちょうど素晴らしい管絃樂を聞く時のような興奮と陶醉とを覚えてそのまま魂が天へ昇って行くような有頂天な気持ちに引きあげられるのである。美食が与える快樂の中には、肉の喜びばかりでなく靈の喜びが含まれて居るのだと、彼等は考えざるを得なかつた。尤も、悪魔は神と同じほどの権力を持って居るらしいから、料理に限らず凡ての肉の喜びも、それが極端

にまで到達すれば其の喜びと一致するかも知れない。……

で、彼等はいずれも美食の為にあってられて、年中大きな太鼓腹を抱えて居た。勿論腹ばかりではなく、身体中が脂肪過多のお蔭ででぶでぶに肥え太り頬や腿のあたりなどは、東坡肉の材料になる豚の肉のようにぶくぶくして脂ぎって居た。彼等のうちの三人までは糖尿病にかかり、そうして殆ど凡ての会員が胃拡張にかかって居た。中には盲腸炎を起して死にかかったものもあった。が、一つには詰まらない虚栄心から、又一つには彼等の遵奉する「美食主義」に飽く迄も忠実ならんとする動機から、誰も病氣などを恐れる者はなかった。たとえ内心では恐れて居てもそのために倶楽部から脱会するほどの意気地なしは一人もなかった。「われわれ会員は、今に残らず胃癌にかかって死ぬだろう。」と、彼等は互に笑いながら語り合つて居た。彼等は恰も、肉を柔かく豊かにするために、暗闇へ入れられてうまい餌食をたらふく喰わせられる鷲の境遇によく似て居た。餌食の為に腹が一杯になった時が、彼等の寿命の終る時かも知らなかった。その時が来るまで、彼等は明け暮れげぶげぶともたれた腹から噫を吐きながら、それでも飽食することを止めずに生きつづけて行くのである。

二

そう云う変り者の集まりであるから、会員の数僅かに五人しかない。彼等は暇さえあると、暇はいつでもあるのだから、結局毎日のように、——彼等の邸宅や、倶楽部の楼上に寄り合つて昼間は大概賭博を打った。賭博の種類は花合わせ、猪鹿蝶、ブリッジ、ナポレオン、ポー

カー、トゥエンティワン、ファイヴハンドレット、……殆どありとあらゆる方法で金を賭ける。彼等は此等の賭博の技術に孰れも甲乙なく熟練して居て、皆相当なばくち打ちであつた。さて夜になると賭博に由つて集まった金が即座に饗宴の費用に供される。夜の会場は会員たちの邸の一つに設けられる折もあるし、市中の料理屋へ持つて行かれることもあつた。但し、市中の料理屋と云つても、彼等は大抵東京の町の中にある有名な料理には喰い飽きてしまつて居た。赤坂の三河屋、浜町の錦水、麻布の興津庵、田端の自笑軒、日本橋の島村、大常盤、小常盤、八新、なにわ屋……と、先ず日本料理ならそんなところを幾回となく喰い荒して、此の頃ではもう有り難くも何ともなくなつて居た。「今夜は何を喰うことにしよう。」——と云う一事が、朝起きた時から彼の唯一の心がかかりであつた。そうして昼間賭博を打ちながらも、彼等は互に夜の料理のことに頭を悩まして居るのである。

「己は今夜、すっぽんの吸い物をたらふくたべたい。」

と、誰やらが勝負の合間に呻るような声をあげると、いい考が浮ばないで弱つて居た外の連中の間に、忽ち激しい食意地が電氣の如く伝染して、一同はいかにも感に堪えたように直ぐと賛成の意を表する。その時から彼等の顔つきや、眼つきは、ばくち打ちの表情以外に一種異様な、餓鬼のような卑しい凄じい光を以て充たされる。

「ああすっぽんか。すっぽんをたらふく喰うのか。……だが東京の料理屋でうまいすっぽんをたらふく喰うことが出来るかなあ。」

すると又誰かが心配そうにこんな独りごとを云う。此の独りごとは口の内でもこそと囁かれ

たにも拘らず、折角食意地の燃え上った一同の元気を少からず沮喪させて、自然と骨牌を打つ手にも勢がなくなつて来る。

「おい、東京じゃあとても駄目だ。今夜の夜汽車で京都へ出かけて、上七軒町のまる屋へ行こう、そうすりゃあ明日の午飯にたらふくすっぱんが喰えるんだ。」

一人が突然斯う云う動議を提出する。

「よかろう、よかろう。京都へでも何処へでも行こう。喰おうと云いだしたらとても喰わずにや居られないからな。」

そこで彼等は始めてはっと愁眉を開いて、更に勢いを盛返した喰意地が胃の腑の底から突き上げて来るのを感じる。わざわざすっぱんが喰いたさに夜汽車に揺られて京都へ行つて、明くる日の晩にはすっぱんのソップがだぶだぶに詰め込まれた大きな腹を、再び心地よく夜汽車に揺す振らせながら東京へ戻つて来るのである。

三

彼等の酔興はだんだんに激しくなつて、鯛茶漬が喰いたさに大阪へ出かけたり、河豚料理がたべたさに下関へ行ったり、秋田名物の鱒の味が恋しさに北国の吹雪の町へ遠征したりする事があつた。追い追いと彼等の舌は平凡な「美食」に対しては麻痺してしまつて、何を舐めても何を啜つても、其処には一向彼等の予期する様な興奮も感激も見出されなくなつて行つた。日本料理は勿論喰い飽きてしまつたし、西洋料理は本場の西洋へ行かない限り、始めから底が知れて居る

し、最後に残った支那料理さえ、——世界中で最も発達した、最も変化に富むと云われて居る濃厚な支那料理でさえ、彼等にはまるで水を飲むようにあっけなく詰まらなく感ぜられるようになった。そうやって来ると、胃の腑に満足を与える為めには、親の病氣よりも一層氣を揉む連中のことであるから、云うまでもなく彼等の心配と不機嫌とは一と通りでなかった。一つには又何か知ら素敵な美味を発見して、会員たちをあつと云わせようと云う功名心から彼等は頻に東京中の食物屋くいものやと云う食物屋を漁り廻った。それはちょうど骨董好きの人間が珍らしい掘り出し物をしようとして、怪しげな古道具屋の店を捜し廻るのと同じであった。会員の一人は銀座四丁目の夜店に出て居る今川焼を喰って見て、それが現在の東京中で一番うまい食物だと云うことをいかにも得意そうに、発見の功を誇りがおに会員一同へ披露した。又ある者は毎夜十二時からすもりごろに烏森の芸者屋町へ売りに来る屋台の焼米シユウマイが、天下第一の美味であると吹聴した。が、そんな報告に釣り込まれて外の連中が試して見ると、それ等は大概発見者自身が余り思案に凝り過ぎて、舌の工合がどうかして居た結果だと云うことになった。実際彼等は食意地の為めに皆少しづつ氣が変になって居るらしかった。他人の発見を笑う者でも、自分がちょっと珍らしい食味に有りつくと、うまいまいも分らずに直ぐと感心してしまうのであった。

「何を喰ってもこうどうも変り映えがしなくっちゃ仕様がなないな。こうなって来るとどうしてもえらいコックを捜し出して、新しい食物くいものを創造するより外にない。」

「コックの天才を尋ね出すか、或いは真に驚嘆すべき料理を考え出した者には、賞金を贈ることにしようじゃないか。」

「だが、いくら味が旨くつても今川焼や焼米シユウマイのようなものには賞金を贈る値打ちはないね。われわれはもっと大規模な饗宴の席に適しい色彩の豊富な奴を要求するんだ。」

「つまり料理のオーケストラが欲しいんだ。」

こんな会話を或る時彼等は語り合った。

そこで、美食倶楽部と云うものが大体どんな性質の会合であり、目下どんな状態にあるかと云うことは、以上の記事でざっと読者諸君にお分りになったであろうと思う。作者は次ぎの物語を書くために、あらかじめ予め此れだけの前書きをして置く次第である。

四

G伯爵は倶楽部の会員のうちでも、財力と無駄な時間とを一番余計に持つて居る、突飛な想像力と機智とに富んだ、一番年の若い、そうして又一番胃の腑の強い貴公子であった。僅か五人の会員から成る倶楽部のことであるから、別段定まった会長と云う者がある訳ではないけれども、倶楽部の会場がG伯爵の邸の楼上に設けられてあつて、其処が彼等の本部になつて居る關係から、自然と伯爵が倶楽部の幹事であり、会長であるが如き地位を占めて居る。従つて、何か知ら素敵な料理を発見して思ふさま美食を貪むさばりたいと云う伯爵の苦心と焦慮とが、外の会員たちよりも一倍激しかったことは茲ここに改めて陳述するまでもあるまい。又外の会員たちにしても、平生から誰よりも創造の才に長たけている伯爵に対して、最も多く発見の望みを囑して居ることは勿論であつた。若し賞金を貰う者があるとすれば、それはきつと伯爵だろうと皆が期待して居た。全く賞金

ぐらいは出してもいいから、何か伯爵が素晴らしい割烹の方法を案出して、沈滞しきった一同の味覚を幽玄微妙な恍惚の境へ導いてくれる事を、心の底から祈らずには居られなかった。

「料理の音楽、料理のオーケストラ。」

伯爵の頭には始終此の言葉が往来して居た。それを味わうことに依って、肉体が蕩け、魂が天へ昇り得るような料理——それを聞くと人間が踊り狂い舞い狂って、狂い死に死んでしまう音楽にも似た、——喰えば喰うほど溜らない美味が滾々と舌にもつれ着いて遂には胃袋が破裂してしまふまで喰わずに居られないような料理、それを何とかして作り出すことが出来れば、自分は立派な芸術家になれるのだがと伯爵は思った。それでなくてさえ空想力の強い伯爵の頭の中には、いろいろの料理に関する荒唐無稽な空想がいきりなしに浮んでは消えた。寝ても覚めても伯爵は食物の夢ばかりを見た。……気が着いて見ると暗い中から白い煙が旨そうにぽかぽかと立って居る。恐ろしい好い香がする。餅を焦したような香だの、鴨を焼くような香だの、豚の生脂の香だの、薤蒜玉葱の香だの、牛鍋のような香だの、強い香や芳しい香や甘い香がゴツチャになって煙の中から立ち昇って来るらしい。じつと暗闇を見詰めると煙の内でも五つ六つの物体が宙に吊り下って居る。一つは豚の白味だかこんにゃくだか分からないが兎に角白くて柔かい塊がぶるぶると顫えて動いて居る。動く度毎にこつてりとした蜜のような汁がぼたり、ぼたりと地面に落ちる。落ちたところを見ると茶色に堆く盛り上って飴のようにこつてりと光って居る。……その左には伯爵が未だ嘗て見たことのないような、素晴らしく大きな蛤らしい貝がある。